

ユビキタス社会の到来と IT(情報技術)への期待

常務取締役
IT本部長

堀越 正勝

Masakatsu Horikoshi
Managing Director
Information Technology Division

ユビキタス・ネットワーク社会が足音高くやってきている。“ユビキタス”とは、ラテン語で「同時にいたるところで存在する」、つまり「あまねく存在(“遍在”)する」という意味だそうである。インターネットの活用は、1990年代の中頃より米国を中心に急速に普及したが、今までのネットワークは、パソコンを中心としたものであった。これからは、パソコンに限らず、テレビ、携帯電話、カーナビなど、あまねく存在する端末を“遍在”利用する本格的なネットワーク時代がやってくる。

ここ1年足らずの間で、ブロードバンドを中心とするインターネットの普及は、あらゆるビジネスモデルを塗り替えんとする勢いすら感じさせる。ブロードバンド、モバイル、RFID(無線タグ)、IPv6といったキーワードが噛み合っ、ユビキタス・ネットワークを巡る変化は一層早まるものと推測される。例えば重要な変化は、携帯電話の使い方である。携帯電話は世界に先駆けて先進的な存在となっており、そのコンテンツ(情報の内容)は、今までの音声、映像、データ通信から、金融、防犯、介護など生活サービス支援に変貌し始めている。また、ブロードバンド環境整備を推進するための「e-Japan戦略」も、2003年からは利活用の段階に移行している。

こうした動きをみていると、ITバブルの崩壊を経験したにもかかわらず、想像は膨らみ一人勝手に思うところである。それは、今、我が国の景気は底を打ち、回復の兆しも見え始めたが、その先がみえない(経済を牽引するパワーがみえない)状況の中で、ユビキタス・ネットワークを新しい社会システムに活用することが、今後の我が国経済を牽引する一つのパワーたり得るのではないかと……。

処で、新しいテクノロジーがビジネスを変えるのは、今も昔も変わらない。今から100年以上前、初めて電気がビジネスに導入された時、驚くべきことに、生産性は全く向上しなかった、生産性が飛躍的に向上するまでには、それから30年という長い年月を要したという。電気が導入される以前の工場は、スチーム・エンジンあるいは水車等を使い機械を動かした。動力



を必要とする機械を動かすためには、プーリーや歯車などを使わなければならなかった。効率的に動力を伝達するためには、大型の機械はスチーム・エンジンを中心に平面的、立体的に設置された事は容易に想像できる。そうした環境の中で、電気の導入は単にスチーム・エンジンの代わりに、モーターを設置したというものであり、旧来方式のこだわりから、機械の配置は従来通りでビジネスの手法を根本的に変えることをしなかった。残念ながら、生産性は飛躍的に上がるはずがなく、機械類の配置を革新的な方法で配置するまでには、管理者たちの一つの世代がリタイアするまでの30年間を要したとのことである。

新しいテクノロジーであるIT(情報技術)の導入は、生産性、収益力、顧客満足度等の向上が期待されることから、今やあらゆる企業に浸透している。古いテクノロジーに代わって、新しいテクノロジーを単に導入しただけでは、生産性を飛躍的に向上させることはできない。ITを導入すれば経営課題が解決するものではなく、大切なことは、ITを何のために、どのように使いこなすか、自分たちのビジネスの構成方法を考え直したときに、初めて大きな改善が達成されるのである。

今後、ユビキタス・ネットワーク社会の到来により、顧客をはじめとする現場の個別情報を経営がリアルタイムで掌握するところまでITは進化し、ITの活用度により企業競争力の差がでる、まさに「IT格差の時代」が予見される。ビジネスを変えるのに昔ほど時間は待つてはくれない。ユーザーとしてのIT技術開発を積み重ね、IT化のトータル設計・評価ができる技術力を涵養することが乗り遅れないためにも肝心である。今、全社をあげて業務プロセス改革の検討が進められている。電力自由化の拡大による競争時代をリードするためには、常に新しいものへのチャレンジする心を持つことが大切である。経営効率を改善し、企業の付加価値を向上させ、顧客に対して差別化したサービスを提供するための顧客価値を創造しうるIT化の推進を期待してやまない。